

---

# 爪切り

田島 大腮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爪切り

### 【Zコード】

Z0511R

### 【作者名】

田島 大腮

### 【あらすじ】

ふと立ち寄った一つのベランダ・・・それが始まりだった。  
「野良」である猫が宿した小さな思い、気づかないあなた。

何度も「やめようなら」って言えばいいんだらう。

ルールが消えたのはいつだつたか、もう分からぬ。生きていくためのルール。自分を保つためのルール。

野良。それは人間にとつて理性と言われるものに似ている気がする。

あの日から野良として生きてきた精神も考え方もなかつたことにした。あたいは甘える膝を求めたし、言葉遣いもがらりと変わった。自分自身の変化がどんなに激しいものでもよかつたの。あたいは、何も与えないあなたに寄り添い続けた。これつて無償の愛と呼べるのかしら。動物的本能にも愛情があると思うと、その存在を感じちゃうと、恥ずかしくてくすぐつた。何も見なくなつた目を封じ、走ることをやめた両手両足をあなたに差し出し、何を聞いても上の空な耳はあなたの声しか頭に運ばなくなつた。時が、ただ流れる。

喉が鳴るとあなたは軽く笑つた。それは肌寒い雨の日。

覚えてるかしら。あたいが雨宿りのつもりで座り込んだベランダのドアをあなたが開けたのよ。洗濯物を干すでもしまうでもなく、天気を確認するでもなく、外の様子を眺めるでもない。当たり前に、あたいがここにいることを知つていたかのように真つ直ぐにあたいを見つけた。一瞬だけ、普段なら何とも思わないアパートの二階の高さに足がすくんで逃げ場が失われ、どんよりとした曇り空がさらに低くなつた。あたいから視線を反らさないあなたに釘付けになりながら、少しの間なら可愛い子の振りをしてえさを十分に補給するのも悪くない、なんて思った。これは生きていくために必要な猫かぶり。猫が猫をかぶつてみせるんだから、人間のあなたには到底見抜けない動物的生存本能でしょう。野良の血に色濃く刻まれた崇高な精神と闘うある種の闘争本能。人間じゃなくたつて、自分自身と闘う生き物がいるつてもよ。

ある日、あなたを引っ掻いた。それは何でもない生活の一部。

あたいの爪は切られた。ぱちん、ぱちん、と音も立てることなく切られた。ペンチで柔らかいチューブを切るような静かな空氣の中、それは儀式のように厳かだつた。あなたに何度も傷をつけた罰なんかかもしれない、そう思うと抵抗をする余地も選択も無かつた。これでもう、あなたに爪痕を残すことなんてないし、あなたは傷を治すこともしなくていい。お互いがお互いを少しだけ離れることができるのでね。

でも本当の気持ちを伝えさせて欲しいの。決してあなたが嫌いなわけじゃない。こんなサディスティックな愛し方しかできなかつただけ。それだけなのよ。今更だけど謝るわ、ごめんなさい。でも爪を切らないでなんて言つたりはしない。あたいはどこまでもあなたに従順でいることにしたの。いくらか睨んでみたり目を潤ませたりしたけれど、どれもあなたは笑つて見下ろしていた。見上げた視界に映るあなたの顎のラインには目が乾くほど見惚れたわ。それを知らせたくって、伝えたくって目の前にあるあなたのふくらはぎを引っ掻いたの。ごめんなさい。急な攻撃にびっくりしたあなたは顔を歪ませていたけれど、その眉間に現れる皺も、大好きだつたの。何度も、何度も手を出したくなるほど可愛らしい様子だつたの。

爪を切られてからというものあたいは上手く生きていいくことが困難になつたみたい。走ることも壙に登ることも昔は難しいことなんて一つもなかつたのに、今ではアスファルトを捉えられないから氷の上にいるように不安定。壙の上を歩くのもまるで素人の綱渡りみたいにハラハラどきどきものよ。だから自然と外に出掛けることが減つていつたの。あなたが仕事に出掛けている間だつて、大人しく丸まっていることが多くなつたわ。部屋の隅で、真ん中で、ところどころに残るあなたの残像に酔いしれた。それでもやはり付き合いとこもののために、あたいは時々部屋を出た。日付も時間も決ま

つていなければ、仲間の声が響き渡ればそれが合図。各自の集めた情報を持ち寄る猫の定例議会が始まる。

首輪のついた猫たちもいくらか見える。野良である私たちが彼らを邪険にしないのは、この街をとても熟知していること、年上であること、それからこの会議が彼らによって受け継がれていることにあります。猫の縦社会は絶対条件。生きていること、それ 자체がすでに榮誉のことなの。

誰かれの繩張りに新参者が踏み入ったことから情報提供は始まり、やがてどこぞの立食パーティーのような雑談が開始される。大抵は人間の噂話や他の生き物に関する話で、そんなときは必ずといってもいいほどに人間は悪の標的になってしまふ。私の場合も例外ではなく、仲間にはよくあなたの悪口を吹き込まれるものだけれど、そんな話には一応乗つてみる。そうするとね、またあなたのこと愛したくなる。ああ、私はあなたのこと見てみたいんだって思っちゃうの。

「どうして爪なんか切るんだろう。僕らにとっては唯一の武器なのにそれを取り上げるなんてひどいなあ。君のところの人間は独占欲がすごいというか独裁的というか、僕らの最も苦手な種類なんじゃないか? そろそろあの家を出たらどうだろ?」

「そうね。いくらあたいが引っ搔くからといつても爪を切ることはないわよね。だいたい爪を引っ搔くには理由があるのよ、ちゃんとした理由が……」

「どうしたんだい、顔が少し赤いみたいじゃないか」

やだわ、あたいったら。あたいが爪を立てる理由はそう、あなたに見惚れたことを表現する手段なのよ。あなたの悪口を言いながらそんなこと考えていると突然あの顎のラインが頭をよぎる。頬を染めて黙ってしまうには充分なの。

「ああ、今日はなんだか天気が悪くて全部がぼやけてる感じがするな」

「夜はどうする? まだ冷えるけれど家に帰れば今日はもう出れなく

なるぞ」

「あいつはすぐ鍵しめるんだよなあ」

「まったくだよ。別にお前に会いたい訳じゃねえっての」

「撫でるときも、手加減してくんないと若干痛いんだよね」

「それ分かる。それにあいつらってさ、無駄にお腹の方を触りたがるだろ？あれ何故か知ってる？」

「何で？何で？」

「ほら、犬がお腹見せるとさ、心開いてる証拠なんだって。だから俺たちもお腹を見せるときも甘えてるって思われてるんだ」

「やんなつちゃうなあ、その勘違い」

「別に可愛いなんて思われたくねえっての」

「ほんと、ほんと」

そんな輪の中であたいはずつと思つてた。可愛いと言われたい。撫でられたい。お腹でも頭でも顎でも足でも耳でも顔でもどこでもいい。触れてもらつて、寄り添つて、あなたに宿る体温をもつともつと感じてみたい。雨に濡れることだって夜中の街を散歩することだって、こんな風に仲間と集まつてやいやい言い合つのだって大好きよ。だけどあなたの寝顔を見ることがあなたの体に乗ることもありにとつては冒険なの。野良である時代の生きがいだった「冒険」なの。体の芯から感じていた「自由」なの。

静かに脈打つお腹の中の音はこの家に来て初めて知った。前の家ではこんなにも人に近づくことはしなかつたから何だか不思議な生き物に出会つたような気分なの。

毎日違う顔をする。それは日々を生きている人間だけができることなど知つた。ただ頭でつかちなだけじゃなくつて、ただ道具が使えるだけじゃないんだつて分かつたら単純に尊敬しちゃつたわ。煙草の煙は必ず上に向かつて吐き出す人間に初めて出会つた。例えあなたがうずくまつても私はそんなあなたよりもっと小さいから、煙が目に染みることがないの。気遣いつて言つたら大袈裟かもしないけれど、あたいが見た人はみんな溜め息と一緒に煙を吐き

出していたの。煙が目に染みるし、それはあたいも下を向いてしまつぱじ悲しくて寂しい姿だつた。でもあなたは違うつてはつきりしたら・・・出られなくなつちやつた。

「おいで」そう言つて膝の上に招くものだから、あなたはあたいにとって唯一の居場所なんだと思った。首輪もなければ決まつた食事の時間だつてない。トイレの場所も決めつけなければ名前だつて与えない。

でもあなたは、あたいのもの。ただ、時が流れた。

「わあ、可愛い。この子いつから飼つてるの？」

「別に飼つてないよ、うちペット禁止だし。野良のわりに懐くから自由に出入りさせてるだけ。でも急に引っ搔いたりするから気をつけろよ」

「名前もつけてないの？」

「うん。必要ないじゃん」

「引っ越ししたから、この子飼おうよ。あのマンションはペット大丈夫だよ。ほら、おいで」

差し出された細くて白い腕には近寄らなかつた。本能とでも言ひべきだらうか、それとも性格とでも言ひのだらうか。これまで培つてきた意地を思いつきり張つてやつた。野良の血が、この先のあなたに寄り添うことを拒んだ。あなたの大切にしているものに自由も冒険も感じなかつたから、あたいは彼女の腕を無視してあなたを睨んだ。あなたは知つているのかしら。あたいがメス猫だつてこと・・・  
・・・・。

窓が開いている。外は明るくてきっと希望に満ちているだらう。野良は、やはり野良なのだ。薄暗い一つの部屋で丸まっているなんて元から不似合いだつたのだ。

あたいはいつものように外に出た。爪はやがて伸びてくるだらう。

もう一度と人間にうつつを抜かしたりしない。  
爪を切る隙など、死ぬまで与えてあげない。

さよならスウェット姿のあなた。

さよなら膝枕の上手なあなた。

さよならヘビースモーカーなあなた。

さよなら、わたしの爪を切ったあなた。

(後書き)

初めての投稿になります。  
読んで頂き、ありがとうございます。

感想など頂けたら・・・幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0511r/>

---

爪切り

2011年10月8日19時13分発行